

500人アンケート

団塊世代のホリエモン論

「ホリエモンは好きではない。その複雑心境を徹底分析!!」




あなたはライオン社の堀江社長を支持しますか、支持しませんか。

支持する	64.1%
支持しない	35.9%

あなたはライオン社の堀江社長を支持しますか、支持しませんか。

支持する	17.0%
支持しない	83.0%

堀江社長への支持・不支持の理由

支持する理由	102人	支持が有利	43人
支持しない理由	22人	支持が不利	25人
両方とも	31人	両方とも	20人
不明	8人	不明	5人

アンケートは、読者総数500人を対象に実施した。有効回答は475人。年齢は20代から70代まで幅広い。性別は男性が約8割、女性が約2割。職業は学生から会社員まで幅広い。また、堀江社長への支持・不支持の理由を詳しく分析した。結果、支持する人は「経営力がすごい」「成功者の生き様が好き」と回答。一方、支持しない人は「成功者の生き様が好きではない」「成功者の生き様が好きではない」と回答。また、両方ともという回答も多かった。これは、堀江社長の行動を支持する一方で、その成功の背景や手段に疑問を抱いている人が多いことを示している。

橋爪大三郎・東工大教授 (社会学、56歳) は、こんなふうに解説する。

「団塊世代はもとも、日本型資本主義に賛成ではなかった。とはいえ、現実問題として彼らの多くは企業に入り、そこそこ昇進し、住宅も手に入れました。そろそろ退職という時期を迎え、やはり何かおかしな、自分たちは妥協しすぎたと思いはじめたのではないかと。経営者が強く、中央省庁や政界とのつながりが大切にされる日本型資本主義の問題があることはわかっています。だからこそ、それと闘う堀江社長の行動を支持しているのです」



社会学者の橋爪大三郎さんは言葉について「言葉は習ったり使ったりするもので、もともと勝手に作るものではありません。相手にわかってもらえない言葉は、言葉ではないんです。相手にわかってもらったら、言葉は『私』の手を離れてしまうんです」と述べた。

『智慧の実のことば』P125 ぴあ株式会社 2005.2.8 発行

2005-5-6

『文藝春秋』第83巻第9号 P153 (株)文藝春秋 2005.7.1 発行
小泉総理「靖国参拝」是か非か

国論を二分する大激論

小泉総理「靖国参拝」是か非か

読者81名アンケート

中国の抱える矛盾
参拝すべき
橋爪大三郎 (東京工業大学教授)

今回の反日デモは、自然発生的なかたちをとっているが、中国政府が日本の国連安保理常任理事国入り反対の意思表示をしたかったのかもしれない。だがその結果、当の中国政府が困惑することになった。経済を開放しながら政治的自由を認めない「社会主義市場経済」の矛盾だ。無許可の反日デモが許されるなら、反政府のデモも可能になる。

日本としては騒がず、ここは静観すべきだろう。両国がいがみ合って、日本以上に損をするのは中国である。変更できない過去より、共に築く未来のほうが重要だろう。この道理を根気よく語り続け、指導者レベルの信頼関係を構築することが大切だ。

2005-5-1

『出版ニュース』通巻2027号 P34 (株)出版ニュース社 2005.1.1.発行

アンケート

今年の執筆予定

到着順

● 橋爪大三郎
社会学

書として『アメリカ論』をまとめる予定。そのほかに、数年来懸案となっていた出来かけの企画がいくつもある。二〇〇五年度中に出版できるかどうかかわからないが、新たな分野の執筆にもかかるとすれば、嬉しい。

セミナー

☆世界は米中二極体制へ

○「中国は二〇一〇年までに経済的な実力ではアメリカを上回る」。橋爪大三郎・東工大教授は、今後の世界情勢を「米中を軸とする不安定な二極体制になる」と分析した。

「アメリカは、巨大化する中国を抑え込むことには、橋爪・中国は、反発するが、経済成長はアメリカの資本や技術が必要で、全面対立はできない」との見方も示した。

日本については「経済力が中国に抜かれ、アメリカがいつまでも守ってくれるお人よしではないことを認識する必要がある」。日本・日中関係を米中関係に埋没させないよう、米中関係の行方を見過す長期的な視野を持つべき」と述べた。

(25日、松本市)

おまけ

2005年(平成17年)7月26日(火曜日)

2005-5-①

68人アンケート



おまけ 「出版ニュース」
2005.12月号

日本国憲法の第9条を改定することについて、
賛否とその理由をお聞かせください。

改憲問題のほかにも、温暖化問題や教育問題なども
大きなテーマになっていますが、
それらを含めて、この国のあり方や方向などについて、
お考えがあればお聞かせください。

橋爪大三郎 (社会学者)

賛成です。

主権国家のパワーバランスが、国際社会の平和を生み出している
現実、現行憲法も前提としていいところ。そんななか、一国が

68 FIGURES OPINIONS

はじめ、たいさぶろう／東京工業大学教授、48年生まれ、「はじめの構造主義」「人間にとて法
とは何か」「言語／性／権力」など、価値システム言語ゲームなど理論社会学により現代を分析

軍備を放棄すれば、権力の真空をうみ、それは他の国の軍事力によっ
て埋められるしかない。第9条は、アメリカの軍事力のプレゼンスを
不可欠としました。現行憲法は、日米安保条約とベアになっているの

125

KOKOKU HIHYO 290 FEB/MAR 2005

「書評のおしごと」

橋爪大三郎著『はじめの構造主義』によって、構造主義の手ほどきを受けた読者も少なくないのではないか。明快・論理的な思考で知られる社会学者・橋爪大三郎氏のこれまでの書評の集成が『書評のおしごと』(A5判・382頁・2500円+税)として刊行されている。



著者は1980年代、ニューアカ・ブームの渦中に登場以来、国内外の動向・思潮を客観的に見すえた著作と発言で論壇をリードしてきた。その著者のこの20年間(83年〜03年)の書評の初めての集成。
思想を読む、社会を読む、知の前線を読む、世界

を読む、時代を読む、生活文化を読む、解説・論文とブックガイド、インタビュート鼎談書評(小林恭二・広瀬克哉・橋爪大三郎)に分けて、約200冊が俎上に載る。
著者のフィールドの広さには改めて感心させられる。細川周平『レコードの美学』、池田清彦『分類という思想』、今野浩『数理決定法入門』、隈研吾

『新・建築入門』なども準備圏である。
「あとがきにかえて」の「書評を書くということ」は著者の『書評論』として興味深い。『書評の書き手は、たいてい、本の著者つまり、自分も書評される側の人間だ。／本の著者たちが、そうやって順番に、読者となり評者となって、互いの本について意見をのべあい、共同で評価を確立していく。その一つひとつのやりとりが、書評なのだ。／当然、そこには、ルールというものがある。公正であること。公平であること。正確であること。率直であること。著者がどんなに著名で、権威があろうと(あるいは、なかりとうと)、知り合いだろうと、誰だろうと、今度書かれた本のなかに即して、その本から言えること(だけ)をはっきりのべる。こうした公開の応酬が、それぞれの本の価値を明らかにして

いく。
さらに書評は必ず褒めることにしている。さもないと読んで楽しくないだろう。褒めるのがむしろ嬉しい。本は書評は原則としてひき受けない。書評は書き慣れることがない。書評はむしろかたし。最初の一行に書評の作業の半分くらいの時間がかかると言ってもよい
――著者の書評に対する心構えも明快である。

海鳥社 〒110-0074 福岡市中
央区大手門 3-6-13 雲0
92-7711-0132

2005-5-②

アンケート 今年の執筆予定

到着順

橋爪大三郎

社会学

前々から持ち越しとなっていた新書を一冊、単行本を二冊出せば、と思っています。幾つか平行する企画があるので、どれが先になるかは判りません。

出産・跡継ぎで 思い重ねて

女性・女系天皇 私はこう思う

橋爪大三郎・東京工業大教授(社会学) 妥当な結論だと言える。国民の支持もあり、国民の総意に支えられる「天皇システム」は、時代や状況に合わせて変化するのは当然だ。

とはいえず、これは問題の先送りではないのか。問題の根本は、国民統合の象徴とどう重い役割を、皇族に生まれた特定個人に押しつけることにある。民主国家・日本にあつかわしい、例えば共

国民も支持、結論妥当

「女帝」誕生に向けて、大きく動き出した。「皇統典範に関する有識者会議」は25日、女性天皇と、母方だけに天皇の血筋を引く女系天皇を認めることを決めた。世論調査でも、女性天皇を認める意見が大勢を占めるようになった。その一方、天皇制の根幹ともいえる皇位継承の原則が、あつたことと変わらぬことだ。

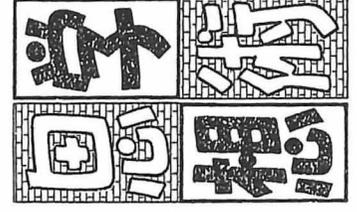
二一面参照

女性天皇を認める傾向は、一般に広がりつつある。衆院憲法調査会は4月の最終報告書に、女性天皇「容認」の方向性を盛り込んだ。民主党は9月の総選挙で、女性の皇位継承を可能とすることをマニフェストに盛り込んだ。日本世論調査会の世論調査では、女性天皇の「容認派」は92年

女性天皇容認増える

に3割ほどだった。99年に半数に達し、03年には4分の3を占め、今年10月に8割を超えた。朝日新聞社の今年1月の世論調査でも、女性天皇を容認する人は86%に達した。ただ、歴史上初めてとされる女系天皇についての質問はしていない。

2004年(平成16年)7月30日



橋爪 大三郎

言語／性／権力

橋爪大三郎社会学講義

第2547号

(3)

入 語

週 刊

列 刊

お び

「社会学のにおい」(序章)などと言われると、微妙な印象を持ってしまふかも知れない。しかし、かつて社会学専攻の学生だった者には妙に納得せられてしまふものがある。最近の社会学の教科書ではほとんど見かけないが、かつて社会学の教科書の定番は「社会学の萌芽」ロントの三段階の道則から始まって、社会有機体説や社会進化論、英米社会学、理解社会学などといった記述が続いていた。そういった記述の背後に感じられる、社会のすべてを説明し尽くすという執拗な意欲、それが「社会学のにおい」である。

本書は、橋爪氏が2000年あまのり間に「理解社会学の構築」を発表した論文をまとめたものである。内容的には多岐にわたる(第1部「言語と社会をめぐって」/第1部「規範の言語と権力の生起」/第2部「競争の社会関係」、それぞれ独立した論文もあるが、そこには「社会学のにおい」に導かれた規範的な意欲があ

橋爪氏の構築する理論社会学はずべて「言語派社会学の原理」(社会学と橋爪大三郎コレクション「I」(勁草書院)において、その基本的な意欲が明らかとされている。言語の形式性を基盤に構築することにより、意味を重視する主観主義と意味を無視した客観主義、現象論的リアリティ(エミタロ)と唯物論的リアリティ(エミタロ)の対立を乗り越え、本書のタイトルにあるように「言語／性／権力」の三つの作用力から出発して、社会理論を構築しようという「言語派社会学」の構築をそれである。

では言語派社会学の構築はどのように構築されたのか。本書の第1章(社会はどのように問題であるか)では、ある日、自分世界の中心でまわっている事業に気づいたと奇妙な幼児体験から、個身体的な形式としての言語を導くストーリーが電話的に語られている。これは別の補助線を引いてみたい。橋爪氏が学生時代に書いた

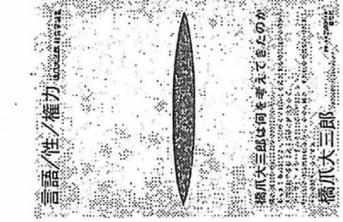
「人類学的演劇論」(『地下演劇』第四号)という論考がある。すでにその中に言語を基盤に据えた理論の構築の萌芽が見られるように思う。人間を人間たらしめるものこそ言語であるという認識が明確に打ち出されているからである。そして興味深いのは演劇の捉え方である。社会学では基本的な概念がしばしば

言語派社会学の構想

群を抜いた包括的なプログラム

巨 明 志

演劇のは感に語られるとがある(ただし、「夜劇」概念ならばその最も定着したものである)。しかし、橋爪氏にとって演劇とは比



46判・334頁・2625円
春秋社
4-393-33225-3

「人類学的演劇論」(『地下演劇』第四号)という論考がある。すでにその中に言語を基盤に据えた理論の構築の萌芽が見られるように思う。人間を人間たらしめるものこそ言語であるという認識が明確に打ち出されているからである。そして興味深いのは演劇の捉え方である。社会学では基本的な概念がしばしば

「人類学的演劇論」(『地下演劇』第四号)という論考がある。すでにその中に言語を基盤に据えた理論の構築の萌芽が見られるように思う。人間を人間たらしめるものこそ言語であるという認識が明確に打ち出されているからである。そして興味深いのは演劇の捉え方である。社会学では基本的な概念がしばしば

橋爪大三郎社会学講義

解するうえで貴重な論考である。(わたら・おろし氏「監獄の歴史」)大学
教授・社会学専攻)
★はしつめ・だんごら
う氏は東京工業大学学
院教授・社会学専攻。東
工大大学院博士課程単位取
得済。著書に「言語ゲ
ームと社会理論」「宗教
の意識形態」「冒険とし
ての社会科学」「橋爪大
三郎コレクションI」
「II」「III」「IV」
「社会学の原理」など。一
九八八(昭和38)年生。